2025 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
経営学部　ビジネス学科	教授	伊藤　恵美子
最終学歴	学　位	専門分野
名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了	博士 （学術）	日本語教育学

Ⅰ　教育活動

〇理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

自律的行動のできる学生の育成

【目標】

受講生一人ひとりが受講開始時より確実に学力が向上し、人間的にも成長して校訓「真面目」が自律的に行え、「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」になるよう指導する。

【方針】

周囲に目配りしながら自主的に動ける人間、ルールが遵守できる責任感のある人間に成長してほしいので、対等な大人として日々学生に接する。

【計画（方法）】

教職員の心構え「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事うるの職分なり」を常に念頭に置き、近年学力の二極化が顕著な本学の実情に勘案して、長期休暇中の指導を含めて個々の学生に必要な指導の見直しを不断に行っていく。

〇担当科目（前期・後期）

（前期）

日本語表現Ⅰ（再履修）、アカデミックライティングⅠ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

日本語表現Ⅱ（再履修）、アカデミックライティングⅡ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

〇教育方法の実践

2025 年度より「日本語表現Ⅰ」が「アカデミックライティングⅠ」に科目名を変更するとともに、全員履修科目としてスタートを切ることに伴い、2 人の非常勤講師を採用した。国立大学から私立大学まで幅広い学習者に対する日本語教育を 30 年以上行ってきたベテランと、数年前に大学院を修了した社会人経験のある若手である。双方の経験と強みを活かして本学の学生にオーダーメイドの教育を施し、鵜飼学長からの教科書作成のご指示に繋げていく計画を立てた。

ところが、本学の定員（40 人）が他大学（国立大 4 人、私立大 20～30 人、平均 20 人強）の 1.3 倍から 2 倍になり、担当者の毎回の添削の負担が大きいだけでなく、指導に従わない学生も多いという理由で、ベテラン教員が 2026 年度の委嘱を辞退され、計画は残念ながら頓挫した。

〇作成した教科書・教材

なし

〇自己評価

新入生の基本的な科目（アカデミックライティング・国語表現等）を重視する大学が年々増加しているのに対して、担当できる教員は限られる。非常勤講師は原則１年契約なので条件（コマ単価のみでない）の良い大学に移るのはやむを得ないだろう。つまり、売り手市場で、流動性が高い。

非常勤講師採用に際しては、本学の学生の特徴を説明してから、履歴書を出していただき、委嘱へと手続きを踏んでいるが、実際に授業を行って次年度辞退とお気持ちが変わることが今後も続くようなら、7～8 月は毎年人探しに明け暮れることになりかねず、長期的なビジョン（習熟度別編成、学長から指示されている教科書作成等）が立てられない。

非常勤講師の本学学生への指導経験の積み重ねが、学生へのエビデンスに基づく確かな指導につながるのは間違いがないので、語学科目の欠員（中国語教員の年度途中の退職）を日本語教員に充てていただけるよう西尾委員長をはじめとして関係する先生方にお願いしたが、専任の日本語教育教員の採用には至らなかった。今年度は経営学部と教育学部の１年生が対象であったが、2026 年度は人間健康学部の新入生も受講対象になる。

2026 年度の入学生は 415 人と聞いている。10 クラス編成で定員 40 人を超過する。大学として少人数教育を標榜するなら、全学的な見地から「アカデミックライティングⅠ」の現状を検討いただきたい。

Ⅱ　研究活動

〇研究課題

（1）応用言語学の課題「第二言語教育のコミュニケーション能力の育成」（究極課題）

（2）大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」（継続課題）

〇目標・計画

【目標】

（2）について

日本語のライティング科目は従来の「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」の内容を整理して、科目名が 2025 年度より「アカデミックライティングⅠ」と改められるとともに全員履修科目となるので、学生・非常勤講師に配慮して良いスタートが切れるようにする。

【計画】

非常勤講師の先生方と緊密に連携して授業運営を行う。

〇2018 年 4 月から 2026 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

なし

（学術論文）

・伊藤恵美子「学ぶ意欲の発達について：自己評価の観点から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 53 巻第１号、2024 年 6 月、47-63 頁

・伊藤恵美子「卒業研究の教育的効果：その軌跡を学生の意欲から分析して」愛知東邦大学『東邦学誌』、第 52 巻第１号、2023 年 6 月、33-46 頁

（学会発表）

なし

（特許）

なし

（その他）

なし

〇科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

〇所属学会

日本語教育学会会員、社会言語科学会会員、留学生教育学会会員、
日本コミュニケーション学会会員

〇自己評価

前述したように、担当者間で「アカデミックライティングⅠ」の教育効果を分析し、次年度の指導に結びつけるとともに、論考にまとめる予定であったが、計画は残念ながら頓挫した。

Ⅲ　大学運営

〇目標・計画

【目標】

2025 年 3 月 5 日付「2025 年度学務分掌」に基づき、研究倫理委員会委員長の命を受けたので、本学の研究活動がさらに盛んになるよう努める。

【計画】

委員会の使命が全うできるよう審議を尽くす。

〇学内委員等

研究活動委員会委員、研究倫理委員会（委員長）

〇自己評価

研究活動委員会では、審議事項等について一研究者として忌憚ない意見を述べた。研究倫理委員会では、学長のお力添えをいただきつつ、各委員から真摯な意見が出されるよう図った。

Ⅳ　社会貢献

〇目標・計画

【目標】

大学教員として科学的研究を進め、研究成果を広く社会に還元する。（継続目標）

【計画】

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。（継続計画）

〇学会活動等

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。（継続計画）

〇地域連携・社会貢献等

地域連携には該当せず

〇自己評価

日本語教育学会学会誌『日本語教育』の査読に 2009 年から携わり、2013 年に学会誌委員会委員の主査（世界で 30 人）に就任し、世界中から投稿される論文の査読を行っている。2023 年からは審査・運営協力員として、今後の学術の発展、及び日本語教育学の研究促進を世界最高レベル

で担っており、大学教員として社会貢献を十分に果たしている。2025 年度は日本語教育学会 5 本の査読を行った。学会活動は、広告のような商業ベースと異なり、高等教育機関としてあるべき本来のアカデミックな側面であり、中堅大学を目指す本学の知名度向上に貢献するものとして、高く評価できよう。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

クレド「人間としての尊厳を持ち、前へ進む」を携えて、演習の枠を超えているとは思うものの、演習生が望む人生を歩めるよう（高校 3 年次の担任の進学指導に落ち度があり、志望校を受験できなかった演習生が編入試験を受けて合格を勝ち取るまで）伴走した。

Ⅵ　総括

ライティングの集大成と言える卒業論文（「専門演習Ⅳ」の必修）を完成した後の学生の感想を、そのまま転記する。無記名式のアンケートなので、学生は特定できない。アンケートに丁寧に記入してくれた学生たちなので、偽らざる心の内の描写であろう。2025 年度より「アカデミックライティング」に注力するため「専門演習」の担当から外れ、「アカデミックライティング」で学んだことを卒業研究にまとめる指導ができなくなったので、最後の指導生の生の声で総括に代える。

＊（研究テーマの理解は）非常に深まった。わかりやすく書けていたと思います。書く時間が多くてよかった。

＊（研究テーマの理解は）深まったので、今後社会人になって役に立つなと思いました。図書館に行って、自分の欲しい情報を選べるようになった。色々なサイトを見て、どれが正しいかなどの情報を正確に選べれた。分析することをしていなかったけど、できるようになった。うまく言葉にすることが学べて良かったです。

＊（研究テーマの理解は）ちゃんと意図をもってやれたので、深まった。必要な文献を収集することができるようになった。調べたらそこから良い情報を選べるようになった。書けるようになった。

＊必要な文献（資料）を選択して、収集するようになれた。要点はまとめられるようになった。（現代社会が直面している課題として）知ることはできたが、貢献はできていない。

＊（研究テーマの理解は）本 5 冊も読むと知らないことを知ることができたから、非常に深まった。今でも（文章を書くのは）にがてだが、卒研を通して能力が上がっていっている実感があった。卒研みたいな長い文を組み立てることがなかったし、これからもなかったので、しっかりできて満足した。

＊（研究テーマの理解は）深まり、女性が少ない企業（部署）だから知識としては良かったと思う。（現代社会が直面している課題として）多くの社会問題を取り上げれたと思うので、大学生として貢献できた。

＊自分では絶対やらなかったが、ゼミの先生の真剣さについていきたいと思った。（調べる力・分析する力は）卒論で必要だったから、上がった。（文章にまとめる力は）教科書で Ｉ からならったから、上がった。（頭に浮かんだことを自分の言葉に置き換える力は）卒論のおかげで上がった。先生さいこう！！

以　上